市仏連会報

発行所
横浜市中区大平町96
光明山西有寺内
横浜市仏教連合会
電話045（661）0166

年頭の御挨拶

横浜市仏教連合会
会長　滝川覚道

謹んで平成五年の新春を賀し、改めて世界の平和と人類の福祉を願い、皆々様の御多幸をお祈り申し上げます。

本年は新年早々皇太子殿下には小和田雅子さまとの御婚約が決りまことに嬉しく心からお慶び申し上げます。

国際感覚豊かなお二人の御結婚は、世界各国との親善友交の上でも大きな貢献が期待されます。

さて、私は昨年より前会長残任期間の会長役をお引受け致しましたが、役員各位の全面的な御協力と皆様方の御支援を頂き、お陰様で主要業務を大過なく務めさせて頂き有難く感謝している次第です。

新年の御挨拶を機会に簡単乍ら本会の執行部と主要業務を紹介し、併せて私の所感の一端を申し述べさせて頂きます。

先づベテランの会報担当玄野孝善副会長（長昌寺）、総務的役割も兼ねてくれます。

前会長と学友の橋下賢明会計（浄念寺）計理に明るく極めて堅実な方です。

事務長役の川上敬吾専務理事（松蔭寺）諸連絡・会議の司会を軽妙にこなします。

会報編集を担当する備前恭忍主任（西福寺）写真や記録も綿密です。

前会長森山正城師はよくぞ適材適所に人材を集めたものかと驚嘆するばかりです。

私は数年来通院中の身で辞退すべきでしたが、選考委員各位の推薦と執行部の協力を背景に残任期間だけは責務を全う致したく努力して参りました。

御承知の通り、横浜市仏教連合会は、県仏と区仏の狭間にあって両仏教会行事に協力する立場上、結構所用が嵩みます。宗連の依頼により県慰霊堂の法要も市仏が担当して、各区仏臨番制で隔月に奉仕し県遺族会から感謝されています。

春秋の仏跡巡拝の旅行は、横浜市釈尊奉讃会と連繋して寺檀の交流を深め、檀信徒の教化に貢献しています。

その他宗派を超えて通仏教的行事、例えば釈尊誕生の花まつり、悟りを開かれた成道会、御入滅の涅槃会等、主催或は後援協力をしています。

更に前会長懸案の税務（斉藤隆法委員長）・墓地（奈良光雄委員長）の両委員会、昨年十月に西有寺に招集、アンケートの集計と内容の検討が行われました。整理がつきましたら委員会の要請に答えて専門家の意見を聞き順次回答出来るようにしたいと存じます。これは継続的事業であり、厄介な問題もあるかと思いますが、個々の寺院の要望にも直接お答え出来る張合いのある事業です。会員各位の積極的な御提案を期待しています。

以上申述べました通り、市仏の役割は極めて重要ですし、行事も漸次拡充されつつあります。市内寺院の要望を満たすためには役員の増員も必要ですし、予算の増加も亦考えねばならない大事なことです。

近く選考委員会で次期役員が推薦されますが、片手間の役職ではなく、誇りをもってリードして下さる新役員の選出を念願する次第です。更なる御支援をお願い申し上げ御挨拶とさせて頂きます。

釈尊涅槃会要綱

本会恒例の釈尊涅槃会（第十八回）法要を厳修いたしますので皆様お誘い合ってご随喜ご参詣いただきたく、会報紙上でご案内申し上げます。

一、日時　平成五年二月十一日。木曜日。午後一時受付。午後一時半法要。二時記念講演。

一、会場　天台真盛宗　新善光寺
　住所　南区三春台一三三
　電話　二三一―五七五四
　住職　県仏会長の福永隆昭師
　（市営バス久保山下車　徒歩約十分）

一、担当　南・港南区仏教会
一、演題　「ねはんえ」
一、講師　久住謙是上人（日蓮宗神奈川県布教師会長）
一、主催　横浜市仏教連合会
　協賛　横浜市釈尊奉讃会

謹賀新年

横浜市仏教連合会

名誉会長　梅田信隆
顧問　志村慎吾
顧問　柳下隆侃
顧問　森山正城
参与　福永隆昭
参与　横山敏明
会長　滝川覚道
副会長
兼会報編集長　玄野孝善
専務理事　川上敬吾
会計　橋下賢明
税務委員長　斎藤隆法
墓地委員長　奈良光雄
監事　野沢隆幸
監事　内野公雄
他役員一同

第八回　秋の名刹参拝の旅

みちのく天台宗寺院紀行

当日描いて下さった
入江正己先生の山寺山門

釈尊奉讃会主大行事の秋の寺院巡拝も八回の実施を数え、平成四年は九月二十九日（火）～十月一日（木）の二泊三日で東北の山寺、中尊寺、毛越寺、瑞巌寺を詣でた。参加者は十七ケ寺の檀信徒ならびに釈尊奉讃会員で約九〇名である。参拝団幹事長は東照寺の程木徳明老師、団長・導師に観音寺の柳下柳侃僧正をいただき、バス二台で早朝六時十分から七時半頃の間に、横浜市内各集合場所を出発した。天気は三日間を通して良好のほうだった。東北自動車道の蓮田サービスエリアで合流し、午前九時五十五分に一号車、二号車と順次発車し、郡山インターチェンジの近くの食堂で十二時十五分より一時十分まで昼食休憩。東北道の白石インターを降りて、蔵王山ハイラインを走行。頂上のお釜の地域は暗雲がたれこめ、霧が深く走行危険かつ見物不可能ということで断念した。その蔵王山中腹越えも霧のため視界がよくない。しかし、上るにつれ、風が強く吹き、霧が晴れると全山紅葉、黄葉の秋景色が見られ、車中に感嘆の声があがった。「来られて良かったあァ。」が感想の代表語。下山した里村ではまだ紅葉には少し早く、思いがけずに蔵王山中で目を見張るような晩秋の錦繍織りなす山肌を霧の晴れ間の束の間に見ることができたので、バスの長旅でのお尻りの痛さも忘れてしまったほどである。それから、山形県で開かれる紅花国体の会場前を通過し、天童市の将棋の駒作りの実演の店へ立ち寄り、夕方五時半頃に天童温泉のホテル王将に到着。

二日目の九月三十日（水）は朝八時十分にホテルを発ち、山寺に参拝する。午前八時半～十時半まで在山。寺の入口で記念写真を撮る。本堂の根本中堂にあがり、外陣で般若心経を唱和し法楽をささげた。山寺の[illegible]様の法話を拝聴した。

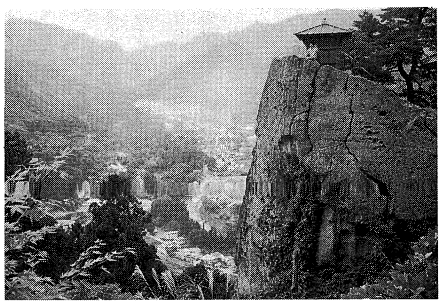
当寺は宝珠山阿所川院立石寺と号し、山寺とは全山の総称である。天台宗に属し、比叡山延暦寺第三世の慈覚大師円仁上人によって、平安時代の貞観二年（八六〇）に清和天皇の勅願により開山された寺である。平安仏教のご恩を受け、東北地方の学問所、霊場の中心として栄え、「関北霊場」と呼ばれ、天台秘法の修行道場として名高い。人間養成、中国文化や産業を殖えつけ、人里離れた幽玄な地で山岳仏教が花開き、平安時代は四〇坊、鎌倉時代には一千軒、三千人の僧侶らが雲集した。戦国の時代に焼かれ、住房は灰燼と化した。室町時代から江戸時代にかけて、二八〇〇石の御朱印地として再興された。元禄二年（一六八九）俳人松尾芭蕉がおとずれて、『閑さや岩にしみ入る蝉の声』の名句を残し、文学の山ともいわれるようになった。根本中堂の内陣の中央正面の

山寺根本中堂

二つの金灯籠の中の灯が「千二百年間不滅の灯」である。仏教の教えは世の人々の心を明るくするので灯になぞらえる。『明らけく後の仏のみよまでも光りつたえよ法のともしび』伝教大師。紅花国体の聖火は山寺の法灯より点火される。天皇、皇后両陛下の来寺があるかもしれないので、境内整備中である。この寺の本尊は薬師如来である。健康を守り体をきたえて心を磨くことの大切さを教える。文殊菩薩は智恵の体得に功徳を施こされる、座禅、写経、学問の仏様である。毘沙門天に祈り、開運をいただく。この根本中堂は約六百年前に再建された。建築用材として、全体の六十パーセントを占めるぶな材の建築物は、同材では全国で一番古く、東北地方の民族性を表わす。

内陣を拝観する。不滅の法灯に合掌する。山寺の素朴、力強さを感じさせるぶな建築の外陣の板壁に貼られた、つもり違い十訓を参考に記す。高いつもりで低いのが教養。低いつもりで高いのが気位。深いつもりで浅いのが知識。浅いつもりで深いのが欲の皮。厚いつもりで薄いのが人情。薄いつもりで厚いのが面の皮。強いつもりで弱いのが根性。弱いつもりで強いのが我。多いつもりで少ないのが分別。少ないつもりで多いのが無駄。奥の院まで往復所用時間は約一時間。石段の数は千余段との説明があり、山寺式凝灰岩の岩肌にきざまれた板碑や洞窟、千体仏を左右に見、頭上に仰ぎながら登山する。古くから死後の魂の帰るべき、先祖信仰の山、庶民信仰の山との評判を取っている。『因縁にものみな絡め死後の相かたどる山寺信なし登る』阿部静枝。奥の院へ無事参拝、汗がにじみでる。振り返っての眺望の絶品に息を呑んだ。下山し門前町で食べたコンニャクの串田楽もうまかった。

十二時半頃に岩手県平泉町に到着し、中尊寺表参道入口の弁慶の墓近くのレストランで昼食。一時半に本堂内で心経読誦の勤行を営んだ。中尊寺の和尚さまのお話しを承った。天台宗・東北大本山。山号を関山といい、慈覚大師を開山とする。本尊阿弥陀仏を祀り、一一四二年間を経る。十二世紀のはじめ、奥州藤原氏の初代清衡公が多くの堂塔を造営した。中央の征東軍に対抗し、藤原三代まで持ちこたえた。前九年・後三年という長い戦乱で亡くなった人の霊をなぐさめ、仏国土の建設を祈願し、

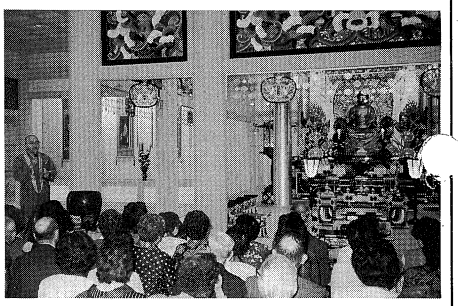


山寺からの眺望

関山に四十四の堂塔や蔵を建て、写経等で供養をした。金色堂では朝夕に鉦を打ち、田畑山野に転がっている霊魂を慰め、金色堂に迎える。金色堂本尊は阿弥陀如来、諸尊諸仏、装飾工芸の須弥壇に至る堂全体が皆金色である。その中に清衡、基衡、秀衡の遺体（ミイラ状）と四代の泰衡の首が納められている。平泉藤原氏百年の栄華が偲ばれる。建武四年（南北朝）に出火し、金色堂と経堂のみ残るが、他の諸堂は焼尽する。

中尊寺の布教部和尚が境内を案内され、金色堂を背景に記念写真をとる。夜中に雨が降ったらしく杉木立から雫が落ち、参道が濡れていて歩くとハネがあがった。芭蕉像と句碑『五月雨（さみだれ）の降のこしてや光堂』が金色堂の傍に在る。資料館を見学、当釈尊奉讃会員で画家の入江正己先生が同行され、入江先生の寄贈作品の阿弥陀さまの絵もそこで拝観した。

中尊寺本堂

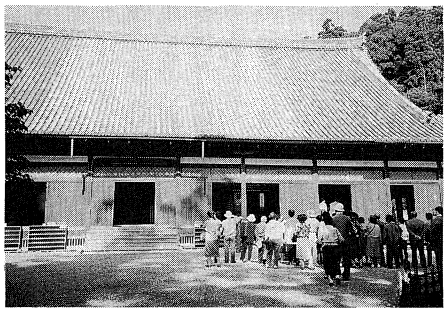

毛越寺本堂

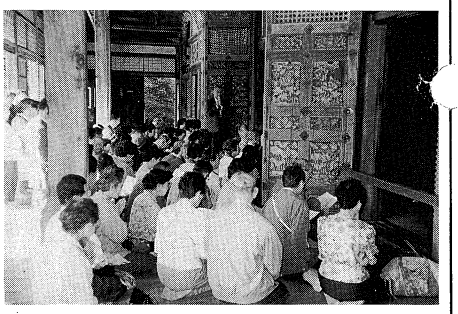
大株の萩の花の満開も広い寺域のあちこちで散見できた。

中尊寺を午後三時に辞し、三時十分に毛越寺を参拝する。一同読経のあと、ご住職の説明を聞く。

嘉祥三年（八五〇）慈覚大師の開山。本尊薬師如来。藤原基衡・秀衡が七堂伽藍を建立、堂塔四十、僧坊五百を教える天台宗の大寺院であった。しかし平安時代の物はほとんど焼失し、残っているのは本尊と浄土庭園と近年に発掘された臨地伽藍跡と石畳等である。平安の雅（みやび）を今に伝える和尚と子供達が演じる延年の舞や遺水（やりみず）に浮べた盃が流れつく間に和歌を詠む曲水（ごくすい）の宴という歌遊びが行われる。芭蕉が元禄二年（一六八九）「おくのほそ道」の旅で訪れた時、かっての奥州藤原氏の都の平泉は、すでに田野と化していた。『夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡』と詠み、栄華をしのび、無常というべき世の変遷に涙した。本堂は毛越寺一山十八坊の根本道場で平成元年に建立された正面七間、奥ゆき六間の平安様式建物である。祈願祈禱の寺院であるから、毎日、平和と国土安穏を修法する。無檀家で来たが墓地霊園も開設した。中学生の体験学習や花供養を営む。萩の花の真盛りで見事。午後四時近くに毛越寺を、住職様に見送られて離山。宮城県松島海岸のホテル一の坊へは五時半頃に到着。得難き一会の懇親の宴を催し、夜は更けた。

三日目の十月一日（木）快晴。朝八時十分に五大堂を拝観、十二支の動物の彫り物が良かった。松島の瑞巌寺の境内へ入る。山門不幸の立札が建つ。そのせいか僧侶の応対は無く、ハンドスピーカの女性ガイドさんの観光案内で石窟修業跡や斉太郎節由来の碑や機関車の車輪を安置した鉄道事故犠牲者の供養塚を見学する。境内参道


瑞巌寺本堂


瑞巌寺内にて

両脇の杉並木や本堂前庭の紅白梅の古木など趣き深い景観の寺であった。瑞巌寺は天長五年（八二八）に慈覚大師円仁が開創の天台宗寺院であった。鎌倉時代中期に臨済宗に改め、松島青龍山瑞巌円福禅寺と称する。江戸時代に仙台藩祖伊達政宗公が改築し、現在の大伽藍が完成した。妙心寺派の修行寺として有名。豪華絢爛な彫刻、彩色と相俟って桃山美術の粋を今に伝える国宝の本堂で本尊聖観世音菩薩を祀る仏間、法要の間外陣廊下でお勤めに心経を唱和。監視人や案内者がとまどった顔をされたのが印象に残った。

九時半に瑞巌寺前の港より松島遊覧船に乗る。八百八島と歌われるが実際には二六〇島だそうだ。日本三景の松島湾では牡蠣（かき）や海苔（のり）の養殖が盛んだった。船から投げるエサをめがけてカモメが群がり飛び交う。船旅旅情をすばらしい景色と共に満喫する。島崎藤村の『飯倉だより』の一節を以下引用。「北村透谷君にも松島へ行って芭蕉を追想した文章があった。俳諧の宗匠たる身で句を成さずに松島から引返したということはおそらく芭蕉の当時にあって非常な不名誉であると思わねばならないが、無言のままでの自然に対して来た芭蕉の姿がかえってなつかしいというのが、松島に遊んだ時の北村君の話であった。（集英社の日本文学全集の第九巻・島崎藤村集㈠）。

十時二十分に塩釜港に到着。バスでかまぼこ工場へ。十一時十五分に出発し、宮城県白石市に十二時十五分着。昼食をして午後一時発車し東北道上り線をひた走る。首都高速線の川口で一号車と二号車、別走行となり五時十分発。横浜市の各出発点到着が七時から八時頃であった。参加寺院名と人数を記し、お世話下さった住職や寺族、また参加者各位のご協力に感

松島湾

謝と御礼を申し上げます。

光明寺様一名。西区仏より円定寺蟹沢良元師一名。鶴見区仏より松蔭寺様二名。栄区仏より大誓寺様二名。神奈川区仏より薬王寺黒多美代子様他五名。金沢区仏より金龍院志村きく様他一名、天然寺関谷たか子様他三名。港北区仏より観音寺柳下隆侃師・澄江様他三名、東照寺程木徳明師・日出子様他十二名、保福寺高橋哲英師・ユキ子様他六名、正覚寺八木良純師一名。戸塚区仏より西蓮寺吉水保子様他一名、龍長院近藤智恵子様他九名。旭区仏より長昌寺玄野孝善師他十一名。瀬谷区仏より宝蔵寺様四名、徳善寺様一名、西福寺備前恭忍師他十三名。

理事会・常務理事会の開催

平成四年十二月二日（水）、午後五時に桂月で理事会会合をした。出席者十八名。鶴見区建功寺・枡野信歩師、神奈川区善龍寺・斎藤幸紹師、西区円定寺・蟹沢良元師、西区洪福寺・奈良光雄師、南区常清寺・片山宣英師、保土ケ谷区旭区正円寺・楠正舜師、金沢区慶珊寺・佐伯隆定師、港北区正覚寺・八木良純師、緑区福聚院・斎藤隆法師、戸塚区高松寺・西尾俊雄師、県仏会長福永隆昭師、市仏連前会長森山正城師、会長滝川覚道師、副会長玄野孝善師、専務理事川上敬吾師、会計橋下賢明師、市仏連顧問弁護士遠藤隆也氏、B・S観光真川明氏、会報備前恭忍師。

専務理事の川上師司会進行役。

一、滝川覚道市仏連会長挨拶。理事会で初承認をいただき、正式に会長代行職を前会長の残任期間、相務めたく皆々様のご協力を切にお願い申し上げます。この会長代行という肩書きは、見方によれば変だと言われるかも知れません。会長が辞められていない訳ですから、後任者は会長であるべきだ。しかし、会長選考委員会が来年の総会で切れる会長任期を日程にいれて会合を持たれるという予定ですので、現時点では代行なのであります。

二、第十八回の釈尊涅槃会開催、運営について当番区の南・港南区仏会長の片山師より報告があった。平成四年十二月十五日に区仏の役員を召集し、詳細な事を決めます。平成五年二月十一日の午后一時。会場候補として久保山の新善光寺様か太田の常照寺様かのどちらかをと思っております。法話は日蓮宗神奈川教区布教師会々長に依頼します。

三、平成五年の春の仏跡参拝の件は、ビーエスの真川氏作成の三案を検討した。平成五年六月十八日（金・友引）実施。静岡県清水市の臨済宗の鉄舟寺と清見寺へ参拝することに決定。

四、役員任期は平成五年三月末日期限なので、役員選考委員会を開催して下さい。メンバーは磯子区仏滝川師、緑区仏斎藤師、泉区仏関水師、港北区仏八木師、保土ケ谷・旭区仏楠師の五名です。選考委員長の斎藤師より「平成五年二月初旬に委員会召集の予定」の発言があった。

五、前会長に滝川会長より感謝状が渡された。顧問委嘱をお願いした。森山正城師謝辞。私事で六月に福聚寺住職を勇退した。大病後で住職を全うできずと判断した。市仏連会長職も辞め、滝川師に後をやってもらう。途中退任でご迷惑をかけ、心苦しく思います。皆様の絶大な支援と協力のお蔭で会長の任務をどうにか果すことができ、心より感謝申し上げます。

六、税務と墓地の委員会を年に二回開きたい。委員会へ名簿未提出の区仏は速やかにお願いする。両委員長と遠藤弁護士が個々の相談に応じる場合もありますので、何か困った問題がありましたら、気軽に両委員長へご一報下さい。

七、平成五年二月発行予定の第三十六号の原稿提出の件でご協力をお願いする。

八、理事会を終了し、懇親会に移る。福永隆紹県仏会長と遠藤顧問弁護士よりご挨拶をいただいた。

支部だより

栄区

毎回栄区の寺院を、御紹介していますが、今回は、浄土真宗本願寺派、菅谷山　長光寺を御紹介いたします。

当寺は、JR根岸線本郷台駅より北へ三百メートルの所に位置し三十数段ある石段右手には、神奈川県名木古木の指定を受けた、樹齢三百五十年を超えた「なんじゃもんじゃの木」もあり、まだまだ緑豊かな所です。

開基は天台宗に属し、薬師如来を本尊とし、「東照山医王院」と号し、伊豆の豪族、伊東祐親の孫祐光の創建と伝えられています。祐親は、流刑中の源頼朝や、文覚上人を寄偶させていました。この時、頼朝の再起を念じて、上人自作の薬師如来像を贈ったのです。この像が、現存する当時の本尊、薬師如来像です。なお、この像は約二十センチメートルの木像座像で約六センチメートルの金鋼製の胎内仏を持っています。

開基当初は、現在地より少し離れた笠間の地で、その後、当地に移ったと伝えられています。祐光は、親鸞上人が、鎌倉にこられた折に、念仏の教えに帰依し、弟子となり、淳心房了源と名も改め、天台宗から浄土真宗へと改宗しました。その後、本願寺三代目覚如上人より寺号を授り、「東照山医王院長光寺」と号するようになったと伝えられています。

戦国時代に入り、小田原北條氏と甲州武田氏の争いの際の、念仏弾圧の波を受け、武蔵国加瀬村に移り、戦後、善立法師が当地に再建し、山号も「菅谷山」と改め、今日に到っています。

前記の薬師如来像は、現在「花立薬師」と呼ばれ、台座には三葉葵の紋が入っています。これは、徳川家康が、当地で鷹狩をしていた時、鷹が松の大木に止り、降りてこないで困り、近くの堂の薬師如来に礼拝したところ、鷹は家康の元へ戻ったとのことです。このことに感謝し、薬師如来に花を供えたことから、その後「花立薬師」と呼ぶようになり、又、長光寺裏山一体を「花立」と呼ぶようになったのです。そして、徳川家からは家紋の下付と、七年に一度、江戸城への登城が許されたと伝えられています。

この他に、当寺には、鎌倉時代に親鸞上人が刻んだと言われる七体の太子像のうちの一体もあります。又、現在の本尊である阿弥陀如来像は恵信僧都の作と言われ、木像で、黒墨衣の像です。古文書は、江戸時代までの近世の文書が数多く、横浜市文化財研究所から「長光寺古文書」として刊行されています。この文書には、当時の寺と民衆との関係等が書きしるされています。

保土ケ谷旭区

保土ケ谷旭区仏教会では恒例となった釈尊成道会を十二月九日浄本真宗清来寺本堂で修行をした。

午前十一時より区内寺院二十五名と善男善女百五十名が参集し、おごそかに法要をすませ、続いて真宗横浜布教所より講師をまねき記念講演があり、あたたかいケンチン汁で体を温め散会した。

十二月二十一日は年末助け合いの托鉢をした。冷たい風の中で、僧侶十八名によって相鉄線鶴ケ峰駅と天王町駅それにJR保土ケ谷駅でそれぞれ修行した。その浄財は神奈川新聞社を通じ寄付した。

頌春

祈法愛

横浜市仏教連合会常務理事
南・港南区仏教会長
日蓮宗常清寺住職
片山宣英
〒232 南区清水ケ丘二三一
電話 二三一―〇六六二

横浜市仏教連合会参与
神奈川県仏教会長
天台真盛宗新善光寺住職
福永隆昭
〒232 南区三春台一三三
電話 二三一―五七五四

横浜市仏教連合会常務理事
戸塚区仏教会長
臨済宗円覚寺派高松寺住職
西尾俊雄
〒244 戸塚区戸塚町四八六四
電話 八六一―三五二七

横浜市仏教連合会顧問
臨済宗建長寺派福聚寺前住職
森山正城
〒240 保土ケ谷区岩井町五六
電話 七一五―五五九四

横浜市仏教連合会常務理事
緑区仏教会長・税務委員長
高野山真言宗福聚院住職
斎藤隆法
〒226 緑区池辺町二二九六
電話 九四一―一三六六

横浜市仏教連合会会長
磯子区仏教会長
高野山真言宗海照寺住職
滝川覚道
〒235 磯子区坂下町四―一九
電話 七五一―七一〇四

横浜市仏教連合会顧問弁護士
遠藤隆也
〒110 東京都台東区東上野二―一八―七
電話 〇三―八三二―二八一九

浄土真宗本願寺派
善龍寺住職
斉藤幸紹
〒221 神奈川区斎藤分町三三
電話 四九一―九四三一

横浜市仏教連合会常務理事
神奈川区仏教会長
曹洞宗本覚寺住職
守長尚文
〒221 神奈川区高島台一―二
電話 三二二―〇一九一

横浜市仏教連合会専務理事
臨済宗建長寺派松蔭寺住職
川上敬吾
〒230 鶴見区東寺尾一―一八―一
電話 五七一―一七〇一

横浜市仏教連合会副会長
保土ケ谷旭区仏教会会計監査
曹洞宗長昌寺住職
玄野孝善
〒241 旭区さちが丘五九
電話 三九一―一三七九

頌春

祈法愛

横浜市仏教連合会会計
浄土宗浄念寺住職
橋下賢明
〒233 港南区野庭町一八四三
電話 八四二―七二八八

横浜市仏教連合会参与
曹洞宗西有寺住職
横山敏明
〒231 中区大平町九六
電話 六六一―〇一六六

横浜市仏教連合会御用達
東海ビーエス観光株式会社社長
真川明
〒240 保土ケ谷区西久保町一―四
電話 三三四―三四〇〇

横浜市仏教連合会常務理事
保土ケ谷・旭区仏教会長
浄土真宗仏光寺派正円寺住職
楠正舜
〒241 旭区中白根一―一―十一
電話 九五一―二五四〇

横浜市仏教連合会常務理事
鶴見区仏教会長
曹洞宗建功寺住職
枡野信歩
〒230 鶴見区馬場一―二―一
電話 五七一―一四六五

横浜市仏教連合会会報担当
真言宗豊山派西福寺住職
備前恭忍
〒246 瀬谷区橋戸三―二一―二
電話 三〇一―六一三四

横浜市仏教連合会常務理事
金沢区仏教会長
真言宗御室派慶珊寺住職
佐伯隆定
〒236 金沢区富岡東四―一―八
電話 七七二―三二六四

横浜市仏教連合会常務理事
港北区仏教会長
天台宗正覚寺住職
八木良純
〒223 港北区茅ケ崎町七八二
電話 九四二―三〇五九

横浜市仏教連合会常務理事
西区仏教会長
臨済宗建長寺派円定寺住職
蟹沢良元
〒220 西区久保町五二―一
電話 二三一―二一四八

横浜市仏教連合会
墓地委員会委員長
臨済宗建長寺派洪福寺住職
奈良光雄
〒220 西区浅間町五―三八六―九
電話 三一一―四六七一

横浜市仏教連合会常務理事
瀬谷区仏教会長
曹洞宗徳善寺住職
尾崎正悳
〒246 瀬谷区本郷三―三六―六
電話 三〇一―〇一九二

みちのくの旅

思い出

横浜市釈尊奉讃会　みちのく参拝旅行　於 山寺（立石寺）　平成4年9月30日

横浜市釈尊奉讃会　みちのく参拝旅行　於 山寺（立石寺）　平成4年9月30日

横浜市釈尊奉讃会　みちのく参拝旅行　於 中尊寺（金色堂）　平成4年9月30日

横浜市釈尊奉讃会　みちのく参拝旅行　於 中尊寺(金色堂)　平成4年9月30日

横浜市釈尊奉讃会　みちのく参拝旅行　於 毛越寺　平成4年9月30日

事務日誌

4・9・25　市仏連発　墓地・税務委員会の開催案内
4・10・20　市仏連発　理事会の案内
4・10・29　諸役会　於浪漫茶屋に於て
4・10・30　墓地・税務委員会の開催　於て西有寺
4・11・5　県慰霊堂奉仕　戸塚区仏教会
4・12・2　理事会の開催　於て桂月
5・1・10　市仏連発　涅槃会の講師依頼
5・1・11　市仏連発　涅槃会の講師依頼
5・1・12　市仏連発　涅槃会の随喜案内
5・1・18　南・港南区仏教会と涅槃会の打合せ
5・2・5　県慰霊堂奉仕　泉区仏教会
5・2・6　涅槃会の打合せ於て新善光寺
5・2・6　市仏連発　奉讃会だより配布依頼
5・2・11　第十八回釈尊涅槃会の開催　於新善光寺
5・2・15　市仏連発　役員選考委員会開催案内
5・2・26　市仏連選考委員会の開催

県慰霊堂奉仕当番

5・4・9　栄区仏教会
5・6・3　瀬谷区仏教会
5・10・5　緑区仏教会
5・11・5　南・港南区仏教会
6・2・5　神奈川区仏教会
6・4・5　西区仏教会

訃報

藤江邦介
横浜市釈尊奉讃会副会長歴任
平成五年一月十二日逝去
告別式は一月十四日　浅間台の自宅に於て

加藤久一
横浜市釈尊奉讃会会計監査歴任
平成五年一月三十日逝去
告別式は二月一日　久保山の小西斎場に於て

編集後記

◎平成五年（一九九三）は癸酉（きゅう＝みずのととり）の年である。外へエネルギーが発する大変強い力の年である。運気の方向を誤らないで、正しく万事を処していくことが、良き命運になる。暦や易学上の一つの判断であろう。

◎仏教は「中道（ちゅうどう）」の教えである。肝心かなめの道と漢訳され、具体的には、わが身を苦しめるのでもないし、快楽にふけるのでもない。どちらでもないから中道という。（中村元『ブッダ入門』より）。この適当を実行するということは、中途半端で怠るということとは全く意味内容が違う。彼岸会は、結果にこだわらず、ひたむきに釈尊の教えの中道を実践する特別週間である。今号への寄稿が少なく、編集発行が遅くなり、彼岸の候となった。